ファントム・ペイン

楠木

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ファントム・ペイン

【Ｎコード】
Ｎ０４５０Ｙ

【作者名】
楠木

【あらすじ】
遠い未来、人類が地球から飛び出して宇宙で生活を始めた時代。食物連鎖の頂点にあった人類に天敵が出現した。戦うことができるのは殲滅兵器に適合することができた資格者のみ。
アシュヴィンは最弱と呼ばれるチームに所属していたのだがとある男が隊長に就任してから、世界が変わった。

序章

黒い空が広がる。本来空気に満ちて、明るいはずの場所は廃墟と化していた。駆けつけた時、すべてが終わったとき、親友はすでに泣いてすらいなかった。

いや、違う。泣くことすらできなくなっていた。

頬に残る涙の後。いくつも筋を作り、頬を流れてぼろぼろになった衣服にうっすらと赤い染みを残している。

ようやく駆けつけたときにはすべて終わっていた。

親友はたった一人ですべてを背負ってしまった。

結局、何も出来なかったと打ちひしがれたのは自分だけではなかった。そこにいたすべてのものが感じた。誰もが目の前の光景に目を奪われていた。

すでに原型も留めていない、巨大な兵器を前にただ親友は見上げていた。

折り重なるそれは、完成されたオブジェクトのようで、青白い非常用の明かりに照らされてやけに冷たい。作り物めいた腕。二の腕から先はない。広がっている黒い水の塊。辛うじて動いている重力制御装置によって、そこに人がいたのだとわかる。

口が、からからに渇いていた。

何か言わなくては。そう思った。しかし幾度か口を開けては、閉じる。

彼を見て、なお何か口に出来るのか？

心の中でせめぎあう言葉。何も、言えない。何も言えるはずがなかった。

囁きにもならない呼び声は彼に辿りつく前に空気に溶けて消えた。
嗚咽が聞こえた。
彼が泣いているわけではない。
彼がこんな状態になっても泣いていないから、だから他のものたちから嗚咽が洩れる。辛いのに泣かない。自分達に泣く資格はない。だが、溢れてくる熱い雫は止まらない。

「……」

このままではいけなかった。
わかっている。
誰かが役目を担わなければならない。ならば自分以外の誰がこれを背負えるだろうか。
誰にも、譲りはしない。

「……、司令室の、早急な復旧を」

かすれていた。
ようやく出た言葉は、慰めるものではなかった。
非難する強い視線を背中に感じて、一歩足を踏み出す。

「……ご指示をお願いできますか？」

親友の視線が、動く。
緊張？　この胸が不整脈に波打つのは。
違う。これは不安だった。
明るかった、誰より前を進んでいた。引っ張ってくれた。救いあげてくれた。自分の光だ。
そんな相手が、今は意志の乏しい、不思議なものを見る目で自分

を見つめる。現状のことすら把握出来ていない。
「……まだ、終わってはいけないんでしょう？」
「そう、だな……」
反応を示した。
小さな喜びが胸をよぎる。
同時に得体のしれない焦燥感。何かを見落としていると、不安は急激に心を蝕む。ぼんやりと見つめながらも、彼はゆっくりと動き出す。小さく、呟く声が聞こえた。
「……終わって、ない……のか」

間違ったのだろうか。
その声を聞いたとき、信じてもいない神に祈りたくなった。
しかし、一瞬の後悔を待ってくれるほど、時間は無限にあるわけではない。
普段の動きではないといえ、親友が動くとそれまで金縛りにあっていた仲間もぎこちなく動き出す。それぞれが散って、先ほど自分が下した命令を忠実に実行に移して行く。
親友も、どうにか動きだした。
笑って送り出せるはずもなく、かといって、このままこの場にとどまらせることも、どちらも望んだことではない。
しかし、今、彼を手放すことはできなかった。
親友同士というそれだけの関係なら……。
しかしそのわずかなためらいも、あわただしく報告に来た部下によって打ち切られることになる。

このときの自分の選択をのちほど、死ぬほど後悔することになる

と全く気づいていなかった。

やる気のない男

世界は人間の天下で永遠に続くと信じられていたころから激変していた。
科学と呼ばれる技術は発達を続けたが一方で多大な破壊も招いた。その最たるもので温暖化と呼ばれていた現象だ。海水面は上昇し、かつて大陸と呼ばれていたものは海中に没したらしい。らしいというのもそれはすでに遠い過去で現存しているものを見ることは出来ない。現在は見ても青い水の固まりがどこまでも広がっている光景でしかないというからオドロキだ。ちなみにそんなものを見て喜ぶ奇特なやつもいるらしい。

しかし人類が滅びる事は、まだ、なかった。急激な気候変動は人類を脅かしはしたが、それでも人類は次なる世界で強かに生き延びたのだ。

温暖化が始まり異常気象に襲われたその頃の人類は、英知を結集して地球と呼ばれるゆりかごから飛び出した。広大な宇宙に移り住んだのはいつのころだったか。
現在、人類は大気につつまれた星ではなく、大気を内包する巨大な長円方のドームで生きている。残念ながら一般人にドームから出ることは許されていないが、数千と連なったドームが暗い空間に浮いている姿は実に不気味だ。巨大な繭が大量に浮いている。あまり見ていて気持ちいいものではない。
ときおり波と呼ばれる振動現象でドームは位置を様々に変えるが、基本的に地球の周囲に多く漂い浮いている。

一般人はドームの中で一生を終え、そのことに疑問を抱く余地もない。太陽は相変わらず存在し、水は豊富な地球がある。宇宙で暮

らすために必要な科学力を人類はすでに手に入れていた。
一般人とはドームで暮らし、そこで仕事を得て一生を終える人間のことだ。ではそれ以外の人間がいるとすれば、何をしているのか。

すなわち、人類を襲った災厄は何も人間が引き起こしたものだけではなかったということだ。いや、言い方を変えよう。これはあくまでも対処できる災厄であったのだと思い知らされた。
最悪の災厄は、人類が宇宙に住みはじめて久しく経ったときに出現したと言われている。
人間を食物とする巨大生物の出現であった。

人類を食用とする生物が、もともと宇宙空間に存在していたのかそれとも人類が宇宙へと活動範囲を広げたために出現したのかは、解明されていない。だが、人類を守ってくれていた地球というゆりかごに戻ることは不可能であり、生活圏を宇宙空間に移していた人類ができた選択は二つ。
一つはその生物の食糧よろしく食われてやること。その生物は単体で行動するのか、一定の周期で活動することは初期に判明していたことだった。一度欲を満たせばしばらく襲われることはない。その周期が一週間なのか一年なのかは個体による。まさしく運を天に任せる選択だ。

そして、もう一つが迎撃行動にうつること。当然ながら人類滅亡を受け入れられるはずもなく、人類が選んだのは後者であった。当時の技術力から考えるとオーバーテクノロジーと呼ばれる、兵器の開発ができてしまったことも一因と言えよう。

それが、最初の殲滅兵器（シヴァ）の登場であったと言われている。

＊＊＊

藍色の髪の男がひょいっと姿を現すと、機体を整備をするためにオレンジ色のつなぎを着ていた男たちが数人いぶかしげにこちらを見た。

ひらひらと手を振って見せたが、眉を寄せられる。まあそうだ。不審人物がいたらそう思うわな、と代わりに左腕につけていた識別証を見せた。グリーンの溶接された腕輪が、身分を証明してくれる。とたんに直立不動で敬礼をされて、少しだけ居たたまれなかった。

「あの、何かご用でしょうか！」

「悪い。ちょっと見学していただけなんだ」

「見学、ですか……」

「ああ。邪魔したな」

気を使われそうになったところで退散した。そういうのは好きではない。司令室の位置はどのドームだろうか似通っているし、迷ったわけではない。

「……」

くしゃりとポケットに突っ込んだ白い紙を目の前でひろげた。興味がない、のだが辞令では抗いようもない。いや、抗うほど気力がない。だからといって積極的に参加したいわけではないから、こうして現実逃避をしているわけで。

「俺なんぞを、よく使おうと思ったもんだぜ」

は、と笑みが漏れる。
上層部の目的は明確だ。言うまでもない。目をつむれば思い出せる。結局、ここから逃げ出すこともできない。逃げ場所なんて、ない。

「あーあ……めんどくせぇ……」

男が格納庫から姿を消して十分も過ぎないうちに、今度は怒りに顔を赤くした女が飛び込んでくることになり、結果整備員たちは二度驚くことになった。ふんわりとした金髪がゆるく、肩のあたりで弧を描いている。瞳の色は青。一見すると美少女だったが残念ながら鼻息荒く、まるで汽笛を吹いている機関車のようだった。

「どこに行ったのよ！　うちの隊長は！」
「ど、どうしたんですか？」
「隊長って……、うちのチームには今隊長いませんよね？」

整備員がかわるがわる告げると、きりりと凛々しい眉がさらに吊り上った。

「だから！　その隊長の就任が今日なのよ！」

＊＊＊

時間は少々巻き戻る。
いらいらと爪を噛んでいるのは、メンバーの中で最年少の少女だった。
「マリエル。せっかくきれいな爪なのに噛んではいけないよ」
金髪が苛立ちと比例するかのように目の前で揺れているのに耐えられなくなったのだろう。なんとか落ち着かせようと銀髪の青年が立ちあがる。
「なんでロイはそんなに冷静なのよ！　これで三時間よ！　三時間。迷ったのかと思ったけど、きちんと時間通りに船は到着しているし！　このドームまで来ているのは間違いないってわかってるの！」
「もしかしたら、その隊長殿……も困っているかもしれないし」
ありえないと思いつつ、繰り返している弁解をもう一度繰り返した。一度や二度ならその理由で納得したかもしれないマリエルも、さすがに十五回を超える同じやりとりを繰り返すつもりはなかった。
「相変わらずお人よしだわ……。いい？　ロイくん。ここまで遅刻するなんてこの狭いドームではありえないと思わない？　ほかのドームと比べて、迎撃用のこのドームなんてそれこそ千人も住むくらいしか規模がないのよ！　壊滅的な方向音痴でもない限り、ありえない！」
ねえ、とマリエルが首をめぐらせると、一人悠々自適に本を読んでいた少年が視線すら動かさずに答えた。短く切った茶髪と黒い瞳。寝そべって完全にリラックスしている。
「面倒。ねえ、部屋に戻っちゃダメ？」

「カスガ！　きっと、もう少しですって」

さらにロイが慌てたが、カスガもマリエルもマイペースだった。

「むしろカスガにとってはイイこと尽くめなんでしょ。訓練を公然とさぼれるんなんて滅多にないんだし」

「ま、マリエル、そんな風に言っちゃダメだよ。さぼりたいとか……よくない」

「事実よ。ほら、見て御覧なさい。カスガは聞いちゃいないわ」

ふん、とマリエルが鼻を鳴らす。普段であればカスガは一切反応しないのだが今日に限ってはじろりとマリエルを見据える。

「ねえ、ちょっと黙ってよ。さっきからうるさくって本に集中できないじゃん」

「……何、この言い分。ムカッときたわ。ちょっとロイ、相手してよ」

「……マリー、八つ当たりは構わないけど、ほら、あと少し……かもしれないから、おとなしくしておこうよ」

もし、と続けようとした言葉は、かぶせられたマリエルのセリフにかき消される。

「あと少しが本当ならいいんだけど、あたしの勘がもっとかかるって告げてるわ。体動かしましょ。それが無理ならせめて本とか暇つぶしになるものがほしいわ！」

マリエルの勘はよく当たる。そしてロイも自分の弁解に無理が出ているのはわかっている。というか、そもそもなぜロイが必死になって二人のためにあれこれ言い訳をしているかもわからなくなって

きた。

「待機命令が出てるからここから出るのはまずいよね」
「ね。ほら、相手して。広いから大丈夫。組手くらいならいけるわ」
「マリー……式典用の服を台無しにしちゃうかもしれない、し」

新隊長の就任式ということで、普段以上に装飾のある衣装をまとっているのは全員が同じである。

「……今日は粘るわね。いつもだったらとっくに相手をしてくれているのに」
「……私もたまには粘ります」
「問答無用！」

ぶん、と音がして、柔らかな足がにょっきりと式典用のきわどい短さのスカートの中から覗いた。ああ、とロイは顔を赤くするわけでもなく、ただ淑女らしからぬマリエルの行動に天を仰いだ。
直後、ばん、と音がした。マリエルの渾身の一撃は、カスガが投げた本を蹴り飛ばして壁にたたきつける。直後、異音がピーピーと鳴り響き、壊れた。

「うるさいマリー。っていうか、ロイに手を出すな」
「都合のいいことだけ聞こえる耳をしてるくせに、イイ反応してるじゃない！」
「ああ！　カスガ！　それ、最新の端末だったじゃないですか！」

ロイの悲鳴は二人とも無視である。

「馬鹿でかい声が面倒。苛立ちが面倒。っていうか、あんたらしくないし」

壊れた本には目も向けずカスガがのろりと立ち上がる。

「はあん？」

「さっさと部屋から出て探しに行けばいい。悪いのは遅れた新隊長と、連れてこれないアシュ。いつものあんただったら、もう行ってる」

「……それもそうね」

マリエルの決断は早かった。

「あああ！　カスガ、なんてことを言っちゃうんです！　マリエルのことだから出て行っちゃいま」

「もう行ったよ」

三時間耐えたのだ。彼女にしては我慢したほうだ。そう考えることで少しでも自分を慰めようとしたが、ロイはあとの騒動を思って頭を抱えた。

「あああああああ……アシュ……すいません。私では無理でした」

ここにはいないリーダーを思ってロイは心で涙を流した。

「だからアシュが悪いんだって。ね？」

天使のような笑みを浮かべてカスガがぽんとロイの肩をたたいた。うっかりそれにほだされそうになる。

「カスガ……」

「僕らも部屋に戻ろう。おなか減った」

「……食欲ですか」
「うん。マリーが先に暴走してくれてよかった」
「……はあ」

確かにおなかがすいたなあ、と思って、結局カスガと共に部屋に戻るあたり、実はロイも大差がないことに突っ込む人物は誰もいなかった。

＊＊＊

アシュヴィンは足早に廊下を進んでいた。すれ違う者はおらず、ただ焦りだけが積もっていく。

普段であればチームで行動を原則としているアシュヴィンがほかの三人を置いて単独行動をとっている理由はひとつである。本日付で隊長に就任すべき人物が、いまだ到着していない。

「港に迎えに行った時間は、間違っていないよな」

そもそも几帳面なアシュヴィンが間違えることはまずなかった。ということは、非常に珍しいことに今回隊長に就任する人物は方向音痴だということだ。

人類が暮らし始めてからドームはほとんど機能が同じだ。特に居住区域に関しては住んでいる人間の好みや国の特徴が出る場合がほとんどだが、アシュヴィンたちが暮らしている特別区には違いがないに等しい。

当然だ。襲ってくる化け物相手に、迷いました、という情けない言い訳が通用するわけもなく、また対応できる人間は限られていた。

殲滅(シヴァ)兵器の登場から数十年。最初の迎撃成功から四十年ほど。近接攻撃特化型、防御特化型など多くの兵器が開発されたが、搭乗できる人間の条件は変わることがなかった。

すなわち、殲滅(シヴァ)兵器をはじめとする兵器に適合できる人物は三億人ほどいる人類の中でたった一握りの人物たちしか持ち得なかった。

未だ殲滅(シヴァ)兵器がオーバーテクノロジーだったと言われる要因のひとつが、この資格者を選ぶというところにある。何が条件なのかが未だに詳しく解明されていないというのだから驚きだ。現在、資格者ではないだろうか、という推測を立てることはできても、人為的に資格者を生み出すことはできていない。

殲滅(シヴァ)兵器に適合する人間が存在している。極論をいえば、身長体重血液型誕生日が完全に一致している人間が二人いたとしても、選ばれる場合と選ばれない場合がある。それくらい、ランダムに資格者は選ばれた。

結果、資格者となった人物は否応なく最前線へと送られ、自身の能力に最も適合する兵器を与えられ戦うことになる。

現在しているチームは十二。ひとつのチームが二百人程度で構成され、交代要員およびサポート要員も含め各チームにひとつずつドームが与えられる。居住型ドームに対し、迎撃型ドームと呼ばれる武装しているドームだ。

アシュヴィンたちのチームは、十二チーム中、最弱と呼ばれている。

「……マリエルたちがおとなしくしてくれていたらいいんだけど…

…」

暫定的に現在チームの責任者はアシュヴィンである。ほかに担当できるものがいないという現実から、きりきりと痛む胃を押さえながらアシュヴィンは走る。

そのとき、通信機が音を立てた。ぴ、と腰に下げていたパネルを開くと声が聞こえる。

「まだ見つからない？」

「リリさんのほうは？」

「コンソールに反応なし。識別信号、登録してもらってないから当然だけどね」

「けっこうみんなに声をかけてもらってるんだけどな……どこに行ったんでしょうね、彼」

チームの中で見慣れない顔があれば、一発でわかる。アシュヴィンは、実働部隊以外のメンバーに声をかけて探してもらっていた。特に司令室にいるメンバーもアシュヴィンと同じように焦っているはずである。

「あああ！　やっぱり新隊長なんて面倒なんじゃない！」

「まあまあ、リリさん」

「アシュ！　あんたは嫌じゃないの！」

リリの言い分もわかって、アシュは苦笑した。

「士官学校だかなんだか知らないけど！　上からの命令だから仕方ないけど、頭でっかちのエリート君とかに来られても困るし！　ついでにひっそり就任式行いたいとかわがまま言ってくれたくせにちゃんと来ないし！　で、挙句の果てには迷子になるな！」

新隊長、ということは、以前このチームを束ねていた人物がいなくなったことを示している。それについてはアシュは言及を避けた。あまり思い出したくないからだ。

「経歴が真っ白ってあたりもくさいんだよね」

「そうなのよ！　絶対何か問題児なのよ！　適当にうちにやっておけばいいや、とかそんな感じかもしれないじゃない！」

最弱。十二チームしか存在しないのは、単純に殲滅兵器の数が六十体弱しか存在せず、またその修理に多大なる費用が掛かり大量生産が望めないことにある。

どうやって作成されたか、また誰によって最初の殲滅（シヴァ）兵器が作られたかは謎とされていた。過去、強力な兵器はその設計図すら秘匿とされていたため、誰にも明かされず、また元を質すことができないもの開発されてから数十年が過ぎていればしかたないのだろう。

兵器に乗ることが許される資格者は、六十人いればいい方だった。それ以外にも資格者は存在していたが、兵器に搭乗ができるほど成長していないか、または年をとっていて操縦桿が握れないか、はたまた激しい戦闘の末に宇宙の塵となっている。

殲滅兵器自体にも、そして操縦者すらも代えが利かないのだ。

故に最弱と言われるアシュヴィンのチームに、有能な人材が集まることはまれだと言われていた。多くは、もっとも殲滅兵器を抱えているチーム＞ラージャ＜にとられる。

しかし、その分このチームのみんなを家族のように思っているんだけどな、とアシュヴィンは苦笑いした。

「僕も、もう少し探してみる。……そろそろマリエルが切れ始める

ころだから、リリさんたちはそっちも見てくれる？」
「あの子たちが頼りにならないって、結構な痛手よね」
「体力はずば抜けているはずだからね」

数百人単位とはいえ、ドームの中を探し回るのはなかなか大変なのだ。通常業務も当然ながらこなさなければならない以上、マリエルたちが使えないのは痛手だった。
通信を切るよ、と言い置いてアシュヴィンはパネルを再び腰にはめた。

「本当、どこにいるんだろう」

おおよそ、人がいそうなところは回ったつもりだ。人気のないほうに行ったのだろうか。ここまで目撃情報もあがらないのではどうしようもない。
一度部屋に戻ったほうがいいのか、と思考をめぐらせた。ほんの数秒に満たない短い時間だった。アシュヴィンの心の底からの本音は、あっけない形でかなえられた。

「誰かを探しているのか？」

背後から声をかけられて、固まった。ば、と振り向きざまに距離を取る。気配がなかった。リリと会話をしていたからといって、声をかけられるほど至近距離まで詰められて、全く気付いていなかったなんてありえなかった。
それも当然だ。このドームの中で戦闘に特化しているのがアシュヴィンをはじめとする四人しかいないのだから。

「……見ない、顔だね」
「見ない顔だろうな」

その男はアシュヴィンの反応ににやにやと笑って見せた。チームにいるメンバーをほとんど知っているアシュヴィンが知らない人物。自然と答えは出る。
居住まいを正して、尋ねる。

「……ルシオン・エーンバルド、様ですか？」
「そういうお前はアシュヴィン・セレクトかい？」

名前を知っていたのか、と目を見張る。藍色の髪の男はアシュヴィンよりも年上だった。藍色の髪は短く、金色の目がおもしろそうにアシュヴィンを眺めていた。
十八という年齢は、資格者の中では年長に分類される。そのアシュヴィンより目に見えて上に見える、ということは士官学校上りの隊長就任ではないということだ。

「お探ししました。今まで、どちらに？」
「お前が想像してるとおり」
「……迷子になられておいででしたか」
「そりゃ、これから暮らすドームの探検は大事だろ？」

探検も何も、居住区でなければ大した違いなどないだろう、という反論を住んでのところで飲み込んだ。打てば返す。言葉のやりとりに、アシュヴィンは戸惑った。以前の隊長と違いすぎる。フランクすぎるやりとりに、どういう対応を取るべきか迷った。

「就任式の時間は過ぎております」
「わかってるよ」
「……」
「いやいや、そのあたりはめちゃくちゃ探してくれたみたいだし。

マジですまないとは思ってる」
「ドームの案内でしたら、就任式が終了し次第させていただきます」
「ああ。よろしく頼むよ」

屈託なく笑ってみせるが、アンバランスな印象を受ける。アシュヴィンの背後を簡単にとってみせたくせに、方向音痴、迷子という言葉を訂正すらせずに、だらりとした姿を見せる。

「あー、アシュヴィン？」
「……はい、なんでしょうか」

ルシオン・エーンバルドが新しく隊長に就任するということは、アシュヴィンが補佐をすべき人物だ。できれば友好的な関係を築きたい。

「……なーんでもない」

にか、と浮かべた笑顔が、存外子どもっぽくてアシュヴィンは返答に詰まった。いたずらが成功した、とばかりに些細なことで表情がころころ変わる。
なんとなく、目が離せない。それが、アシュヴィンが最初にルシオンに対してもった感想だった。

やる気のない男（後書き）

読んでいただいてありがとうございました。

続、やる気のない男

ひとつのドームにひとつのチーム。天敵を倒すために、人類がとった戦法は集団戦法であった。殲滅する際の火力を担当する近距離型、近距離支援の中距離型、広域攻撃が可能な遠距離型、索敵を担当する現場のレーダー役感知型、そしてドーム周辺での防衛の拠点となる防衛型。殲滅（シヴァ）兵器は多くのタイプに分類することができる。

その多くは人型を模している。行動原理が人間からかけ離れた形をしていては、結果成果があがらなかったからか。殲滅（シヴァ）兵器は最初のシヴァの形を踏襲して、人型をしていた。

最も資格者が所属しているチーム＞ラージャ＜では十人を超える資格者と、選りすぐりの殲滅兵器が配備されている。その中には予備軍と呼ばれる資格候補者も含まれ、実働部隊のサポートを担当している。

アシュヴィンたちが戦うべき天敵を総称して＞ルドラ＜と呼んだ。

＊＊＊

就任式は略式で行われた。五分という短い時間で済ませた人物は歴史上ほかに類を見ないかもしれない。五分で済ませたいという人間は多くても、形式を重んじる人間もまた多い。それが、ひとつのチームを預かるとなれば長くて当たり前だ。

ルシオンが「ひっそりと」就任式を行いたい、というからそもそも主要だったメンバーにしか通達をしていない。就任式が終わったあとで顔合わせをする予定だったのだ。

三時間の遅刻に加え、就任証を文字通り「いただいた」だけで終わりだ。ドームの中で最も大きな式典に利用するホールを使うわけでもなく、司令室の隣になる二十人も入ればいっぱいになる部屋で。

檀上にはルシオン。その右手側に実働部隊となるアシュヴィンを始め、ロイ、カスガ、マリエルが並ぶ。左手側には司令室に詰めるメンバーが、リリを始め八人ほど並んでいた。さらにその後ろには整備部のリーダーがいる。

アシュヴィンも驚いた。だが、ほかの人間より数分ほどルシオンと接した時間が長かったからか、驚きを飛び越えてあきれた程度で済んだ。ほかの面々は口を大きくあけてぽかんとしていた。マリエルは怒りが頭の先まで浸透していたようだが。

だがルシオンは現在集まっているメンバーの誰よりも立場が上だ。面と向かって注進するには腰が引ける。顔合わせの初日であり、さらにはどんな性格か想像もつかない。

最後の一押しは、就任する隊長本人の言葉だった。

「時間もったいないだろ？　それに俺、堅苦しいのは好きじゃないんだ」

だったらお前が遅刻したのはどうなんだ！　とそのとき全員の心は一つだったに違いない。解散！　とルシオンに言われ、司令室の主な面々、そして実働部隊と呼ばれる四人は顔を見合わせた。どうしよう、この人。

ふつう、というか、一般常識に照らし合わせれば、ここで所信表明や今後の目的を話し、チーム内で見解の統一を図るものではない

のだろうか。

微妙な沈黙に対し、果敢に攻めていったのは、司令室を預かるリーダーであるリリ・ギナルであった。茶髪ときつく吊り上った目を見る限り、機嫌はよいと言えない。

最悪だと言える。

「ルシオン隊長、我がチームへの就任、メンバーを代表して心より歓迎申し上げます。……少々申し上げたいことが」

「どうぞ」

「時間がもったいないと先ほどおっしゃっておいででしたが、式が遅延し」

「あー、うん。悪かったな」

へらりと笑って謝られても！　謝罪が聞きたいわけではなく、理由が知りたい。最後まで言わせろ、とリリの顔が険しくなりかけた。ふとアシュヴィンは気付いた。この隊長は自分の自己紹介すらしていない。

リリが話している言葉を遮ってまで突っ込みはしないが、結局年齢はどれくらいなのだろうか、とルシオンを見てみる。アシュヴィンより年上、ということは二十歳を超えているはずだ。

年上の威厳について、つい考えてしまう。

「……このドームで迷子になられるんでしたら、必ず今ここにいるメンバーと行動を共にしてください。差し支えなければ、アシュヴィンを補佐につけさせていただきます」

率直に迷子という言葉を告げてみたが、ルシオンは否定するどころか、ひらひらと左腕の腕輪を見せる。グリーンの溶接された腕輪は、彼が間違いなく隊長格と等しく力がある証だ。ちなみに資格者

はオレンジの腕輪でサポートを担当するメンバーは黒の腕輪を身に着けている。

「端末あるから平気だって。登録もした」
「……港からここまで迷われたんですよね？」
「そうだな」
「でしたら、必ず今ここにいるメンバーと行動を共にしてください」

ええ、と不満そうだったがリリが押し切った。ほかのメンバーも似たり寄ったりな顔をしている。端末があろうとなかろうと、登録していようと迷っていれば探しに行かなければならないのだ。だったら一人そばに着けたほうがいい。

リリの頭の中で、アシュヴィンに役目を回すことは決定事項だったのだろう。付き合いの長い司令室リーダーの思考回路は把握済みだ。

「では、今後の出動および訓練体制について相談させていただきたいのですが」
「リリ嬢。それについてはアシュヴィンに一任する」

さっくりとさも当然のようにルシオンは告げた。

「は……？」
「だから、出動および訓練体制に関してアシュヴィンに一任する。つまり、今までどおりにアシュヴィン主導でやってくれ。あとのことはわかんなかったら、俺から聞くから説明はいらないよ。あと今日は就任初日なんだから、休ませてくれよー」

へらり、と笑い「じゃあな」と軽く言い残すとルシオンはそのまま司令室を後にした。誰も動けなかった。あんまりな内容に誰もが

フリーズしていたのだ。主要なメンバーの前で宣言した。
つまり、ルシオンは簡易ではあるが、実質的な指揮権をすべてアシュヴィンに投げたということになる。

「……アシュ」

地の底を這うようなリリの声に、アシュヴィンもまた乾いた声が漏れた。最後に爆弾を落としていった、あの人。

「僕の責任かな、今の」
「違うわ」
「よかった。僕の認識が間違っているのかと思ったよ」

悪いことはした覚えがないが、リリの視線があまりに激しく、胸のあたりを押さえる。リリの視線だけで人間を殺せるかもしれない。実働部隊でもないのに殺気が出せるってすごいじゃないか、とアシュヴィンは心の中で思った。口に出したら殴られるだろう。

「ここまで引っ張っておいて、あれは何！」

ぎいい！　と唸るリリ。どう、どう、とリリを落ち着かせているのは司令室の面々だ。慣れている。
アシュヴィンの隣を見れば、完全に舟をこいでるカスガとそれをおろおろしながら助けているロイ。そしてリリと同じく噴火しているマリエルがいた。ため息が漏れる。よくも悪くも個性的な人間ばかりそろったものだ。

「アシュ！　あの人何考えてるの！」
「……さあ？　僕もわからないよ」
「さあって何、さあって！　しかも整備部からの証言があったんだ

けど、あの人格納庫にふらっとやってきたんだって！　わけわかんない！　港から司令室までほぼ一直線よ？　格納庫なんて対極線上にあるのよ？　迷子って……迷子って！」

だんだん、と地団駄を踏むマリエルは、年相応に見えた。

「ああ……頑張ったね、マリー」

そこまでマリエルは探しに行ったらしい。俊足だ。ちょうど行き違いだったらしく、マリエルの勘が冴えわたっていたな、と半ばアシュヴィンは逃避気味で話を聞く。

「……いいのか悪いのか、微妙なところですね、アシュ」

ロイの控えめな言葉に傾いた。破天荒といえばいいのだろうか。よくわからないままに、顔合わせも終わらせられたというべきか。

「僕たちに任せてくれるという言質があったのは嬉しいけどね」

それがなかったために、以前は苦労を強いられた。今回はそれがない。そこはクリアした、とほっと息を吐く。命をぎりぎりでやり取りする現場に、無能な指揮官はいらないのだ。

ただ、とアシュは気になった。こちらに指揮権を預けてくれるのはありがたい。裏を考えてしまう。人間、一度手に入れた権力を手放すことは難しいものだ。ルシオンの本意はどこにあるのだろうか。

「もう！　アシュってば聞いているの？」

「はいはい。で、マリーの感想は？」

「正直よくわかんない」

マリエルの勘はよく当たる。先ほどの噴火っぷりから一転して、マリエルは青い瞳を細めて告げた。リリも腕を組んで耳を傾けている。

マリエルの勘はまさしく勘でしかない。これだけ時代が進み、技術革新が行われたというのに、感覚という身近な能力については未知数だ。

「よくわからないなんて久しぶりなんだけど、強い、と思う」

「それはずいぶん高い評価だね」

アシュヴィンの言葉に首を縦に振った。

「たぶんだけど、弱いより強いといったほうがしっくりくるの。強いなら隠す理由がわからないし。すごく自然体っていうのかな。そんな感じなの」

「確かにそうよね。隠す理由なんてないわ。……ルドラを倒さないと死ぬ。わかりきっていることよ」

リリがはっきりと言った。強いチームに配属され、戦い続ける。それがアシュヴィンたちに課せられた役目だ。

「うーん。情報が足りなさすぎる、か。もともと隊長殿のパーソナルデータも少ないんだよな」

手のひらを顎に当てる。ここで話す時間が取れるかと思っていたら、当ても外れた。

前歴が真っ白な状態で画像もなし。どこのドーム出身かくらい書いてあるべきなのにそれすらもない。胡散臭いことこの上ない人物だ。さすがに上に文句を連ねたが突っぱねられた。これですべてだ、なんてどこぞの子どもの言い訳にもならない。

上層部がねじりこんでくるような人物だから、リリとアシュヴィンは士官学校上りの坊ちゃんが来るのかと身構えていたわけだ。パーソナルデータも公開できないほどのボンクラか、と思っていたら現実とは百八十度異なっている。

「……そういえば、少し気になることが」

控えめに手を挙げたのは、リリの部下の一人であるレオリアである。眼鏡をかけた長身の女だ。

「どうしたの？」

「あの、私たちは自己紹介をしておりません。隊長もそうですが」

「そうだね」

「隊長はどこでリーダーの名前をお知りになったのでしょうか」

リリ嬢、とごく自然にルシオンは名前を呼んだ。それはアシュヴィンを呼んだときと同じように。

そういえば……と顔を再度見合わせる。

「私、名前を言ったかしら？」

リリも先ほどは怒りが全面に出ていたからか、気付いていなかったらしい。アシュヴィンはルシオンを連れて行って、そのまま就任式だ。名前を呼ぶ間もなければ、自己紹介をさせてくれるような時間もくれなかった。

「何もしてないな」

そのとき、ふわあ、と大あくびをして、目をこすりながら起き上ったのはカスガだった。おはよう、なんてのんびりしている。

「おはよう、カスガ。……ロイ、肩を貸してやるな。また寝るよ」
「カスガ、ほら、起きてください。アシュもみなさんいるんですから」

ロイがカスガの肩を揺り動かす。んー、と寝ぼけた声でカスガが言った。

「新しい隊長さん、面倒な人？」
「面倒かそうじゃないかで判断するなって」
「面白そうな人ではあるけど」

ぐ、と背筋を伸ばすと、目じりから涙がこぼれた。

「面白そうってどういうことかしら？」

リリが尋ねるとカスガがつぶやく。

「いつの間にか気配がない感じがする」

ざわざわしなかった、と告げたカスガは、後方支援探知型という機体を操る。人一倍気配に敏い。その、カスガがわからなかったということは。

「あの隊長、実はやり手？」

マリエルが心底嫌そうに言った。

「僕も、そういえば会った瞬間に名前を言われたし……このドームに百人近くいる全員覚えているってことかな？」

「全員じゃなくても、実働部隊と司令室メンバーと……それくらいならいけると思うわ。こっちは画像つきでデータ送ってるし」

リリの言い分も一理ある。実に微妙だ。先ほどの態度がすべてだとしたらやり手どころか怠け癖があると受け取るに決まっている。

「微妙なところですね」

こくりとロイが傾いた。

「……隊長は解散っておっしゃってたけど、そうもいかないな……」

簡易ではあれ、指揮権を得ることができたならさっそく呼び出そうではないか。実働部隊との打ち合わせはできれば今日中にしておきたい。今、このタイミングで出動がないとは限らないのだから。

あわただしく動き始める。ミーティングルームをひとつ借りる手配をして、アシュヴィンはマリエルとロイに言った。カスガは眠りの世界に再び旅立っている。

「隊長を探しに行こうか。そのあと3号ルームでミーティングするよ」

「了解です」

「はいはーい。さっさと探しに行きましょ！　あと！　ロイは組手の相手、してよね」

「え、えええ、諦めてなかったの？」

「むしろまたムカッとしてきたの！」

にぎやかに二人が部屋から出て行く。おそらくルシオンは自分の部屋に戻ったのだろうと楽観していたアシュヴィンに緊急連絡が入るのはそれからすぐだった。

＊＊＊

アシュヴィンが歩いていると背後から声をかけられた。

「俺の部屋の説明が、まだだったよな」

ルシオンだ。完全に背後を取られた。びくり、と肩が跳ね上がり、おそるおそる振り向いた。そのときの顔がかなり微妙な感じだったのだろう。ルシオンは笑っていた。

「ん？　どうした？」

どうした、ではない。なんでそんなに呑気な顔をして、ごく当然というように背後に立っている。どこから湧いて出た。

あのあと、ルシオンを探そうとロイ、マリエル、カスガもたたき起こして動き回った。緊急通信の内容は、ルシオンが部屋にいない、だった。だが、ルシオンを探しだすことはできなかった。リリにお願いして動きを追跡してもらっていたにも関わらず、ルシオンは一度も姿を見せることがなかった。

端末に連絡を入れても無視された。一体、何だこの人、とせっかく上方修正した認識を再度改める。

どうしよう、この人。全く持ってどう対応すべきかわからない。

「隊長……お聞きしたいことが、あります」

何が楽しいのか笑っている。このルシオンは異例尽くめだ。何から何まで、アシュヴィンの知っている常識と違う。

何と尋ねたらいいのだろうか。親しみやすいといえば聞こえはいいが、仕事をアシュヴィンに振っているのは事実だ。では怠け者なのかと言われれば、そこもよくわからない。就任初日だとそんなものか。

それとも隊長に就任すると、隊員から全力で逃げなければならないという裏ルールでもあるのだろうか。逃げているとしか思えなかった。ただの迷子がことごとくマリエルやロイや、カスガの追跡を逃れるとは思えない。

「あなたは僕たちのチームの、隊長なんですよね？」

「残念ながら」

「残念、なんですか？」

何が？　と聞きたい。残念なのはルシオンなのかなのか。それともこのチームに対して言っているのか。それによって意味がかなり違ってくる。

「残念じゃねえの？　残念だろ、こんなのが隊長で」

どういう意味でこんなの、と言っているのかを聞きたい。わざとなのか、それとも天然なのか。

「隊長が、何をおっしゃっているのか、正直わかりません」

「あはは！　アシュヴィンは素直だな！」

「素直ついでに、あなたが何をしたいのか、わからなくて困っています」

ずばりと告げた。ルシオンはこれからこのチームを率いてもらわ

なければならない。ゲームではない。命を懸けて、戦わなければならない。
もう二度と、あんなことにならないために。
ルシオンは金色の目を猫のように細めた。
「アシュヴィンは隊長らしくない俺に、隊長らしいことをしてほしいってことか？」
チームの数だけ信念がある。隊長の形なんてそれぞれだ。だが、ルシオンはそれすらもアシュヴィンたちに告げない。どうしていいかわからない、と途方に暮れる。
わからない。マリエルも言っていた。この男は、よくわからない。
強いのかと見せかけて、実は違うのかもしれない。弱くはない。だが、底を見せない。
このドームに着いてから、結局三時間もルシオンは迷子になっていたという。だが、目撃証言はなきに等しく、整備部の人間が声をかけていなければ誰にも気づかれていなかった。結果港についたという到着データ以外、ルシオンは行方をくらませていたのだ。
初めてやってきたドームの構造が分からずに迷子になる人間が、誰にもすれ違うことなく、ドーム内で最も複雑に入り組んだ先にある殲滅兵器の格納庫に来た。もちろん、抜け道は存在している。だが、そこを通るにはドームの構造に精通していなければ無理な話だ。
そしてつい先ほどは、実働部隊の四人から完璧に逃げ切って見せた。
アシュヴィンの名前を当ててみせた。それはすなわち、こちらが提供したデータに目を通しているということだ。アシュヴィンほか、実働部隊は四名しかおらず、アシュヴィンは目を引く赤毛ではある

が画像と実物は印象が違う。

アシュヴィンに指揮権を渡したということは、何をしてもいいということなのか。どこまでが許されるかもわからない。それすらも自分のやり方次第だというならば、アシュヴィンは試されていることになる。

ルシオン・エーンバルドは有能なのかそうでないのか、全くわからない。

アシュヴィンの顔を見て何を思ったのか、ルシオンは両腕を頭の後ろで組んだ。笑った顔がやけに幼く見える。

「……考えすぎ、アシュヴィンは」

「そう、でしょうか」

「真面目はいいことだ。でもがちがちに理屈に当てはめた頭じゃ何にもならないだろ。リラックス、リラックス。これでもおにーさんもちょっとは考えているわけなんだよ、実は」

「……そうですか」

これ以上ないほどリラックスしている人に言われても、と言い返しかけた言葉を飲み込んだ。

「信じてないなー。まあいいや。明日からアシュヴィンは俺の補佐についてくれるんだっけ？　面倒だろ？　司令室に適当に行くよ？」

適当と言ってこない可能性がある、とアシュヴィンは首を振った。先に手を打つ方がいい。探し回っても見つからない可能性があるのであれば、なおさら。

「いえ。朝、定時になりましたら迎えにあがります。食堂の場所は

ご存じですか？」
「知らないから案内してくれよ。ついでに夕飯を一緒に食うか。で、明日の予定とか教えてくれ」
「かしこまりました」

ルシオンを連れて食堂へ行くと、そこにはゾンビのように疲れ果てているマリエルとロイが先に食事を始めており、カスガは完全に撃沈した状態で眠っていた。ルシオンがいることを発見したチームのメンバーが結局、そろって夕食を食べることになるのはこの後のことである。

続、やる気のない男（後書き）

読んでいただいてありがとうございました。

素直じゃない男

ため息をひとつ吐くと、幸せがひとつ逃げるとはいつのころの格言だったのだろうか。遙かな未来で残っているのだから言葉というのはわからない。疲れた。精神的に疲れた。

どうしてこのチームなのだろうか、と居心地の悪さを感じて、ルシオンは寝返りを打った。慣れない匂い。清潔なシーツを体に巻きつけてごろりとまた転がる。

「俺なんかじゃなくていいだろ……」

めんどくせえ、とつぶやいてみた。それに返す言葉はない。あったら驚きだ。

もし、ルシオンがこうなることまで考えていたなら、とんだ策士だ。ドSだ。性格が悪すぎる、と親友を思い浮かべる。親友だったよね、と思わず確認したくなる程度に。

ここは、居心地が悪い。

慣れない。慣れ合わない。早く次の人間を上に配属したほうがいい。ルシオンに何を上層部が望んでいたとしても、叶えるつもりはないのだ。

『残念、なんですか？』

ルシオンの補佐になるという青年は、十八だった。ルシオンよりも五つ下だ。修羅場をくぐりぬけてきたのだろう。褐色の瞳は同じ年齢の青年よりもずいぶん大人に見えた。

「ホント、最悪……」

『あなたが何をしたいかわからなくて困っています』

素直なところなんてなくていいのに。大人の余裕でからかって見せたが、取り繕えているだろうか。苦労しているだろうに、ルシオンを見る目には濁りがない。うらやましい。そんな醜い感情すら沸き起こってきそうだ。

何かをしたいわけではない。何もしたくないのだ。ただ、逃げて逃げて、逃げてきただけだ。そんなルシオンに、このチームを引っ張る資格なんてあるわけがない。

ここは、本当に居心地が悪い。

＊＊＊

チームは基本的に規則正しい生活をすることを強いられる。常に万全の状態で出撃に備えるのだ。シフト別の交代制だ。

現在司令室に詰めるのは、リリ、レオリアを含め五人。男女比は二：三で女のほうが多い。

「新しい隊長さん、不思議な人ですね」

高速で手を動かしながらレオリアが言った。一度も止まることなく指がキーボードをたたき続ける。

「いい人っぽいけど、頼りなさげ。あ、そこ、ポイントマイナスして」

レオリアと同じくリリを補佐するサクラはばっさりと切って捨てた。第一印象はまさしく「大丈夫、この人？」だったとしきりにレオリアに話しかけている。

「了解っす。……しかし、これで隊長も頼りないとなるとアシュもまた抱え込みそうで、おいらはそこが心配っす。リリねーさん、どうぞー」

イワンがあがってきたデータをリリの手元へと転送する。本日の実働部隊の訓練結果である。

「情けない結果が出れば、＞インドラ＜からお荷物扱いされるったら！」

目は止まることなく数値を見ている。身体データは毎朝更新され、資格者たちは体の状況をこと細かくチェックされる。体調を崩す余裕なんぞ存在しない。

「ほう。我らがリーダーは＞インドラ＜の愚か者に言い返せないとは、ついぞ知らなかったな」

ラークスが含み笑いをしながら告げた。きりり、とリリの眉が吊り上った。娯楽の少ないチーム同士の話題は、よく広まる。朝いちばんですでにやりあったことをどうしてラークスが知っているのか、考えるだけ無駄だ。

「もう三倍で言い返してやったわ！」

さすが！　と歓声があがったところでリリが号令をかける。一斉に司令室の機能が行動を開始する。

「あの子たちの様子はどう？」
「データから見る限り、普段どおりです」
「そ」

アシュヴィンから報告が上がってくるだろう。ルシオンにも話を通さなければならない、とリリは椅子に深く腰掛けた。
新しい隊長として就任したルシオンの考えは当たりだとリリは思っている。このチームにいる資格者たちは、一癖も二癖も問題を抱えている。カスガにしろ、マリエルにしろ、そしてあの一見して穏やかに見えるロイですら抱えている。

資格者に選ばれれば、拒否できない。ただでさえ数の少ない資格者を野放しにはできない。さらに、資格者が出るとその家は経済的な保障される。子どもであれ、年齢をいった大人であれ、それは変わらない。
多くは、年少のころに資格者として判明し、士官学校に放り込まれるのだ。その力の使い方を学ぶために。
選ばれるという言葉は、時として毒にもなる。洗脳思想に近い、選民意識と戦うことを当然だという考えを植え付けるのだ。いつが戦場に出て戦うときに躊躇わないように。

「アシュヴィンも、あれで特殊なタイプだからね……」

苦労性と現在チームのまとめ役を引き受けているアシュヴィンも、順当に士官学校に入学したわけではない。おそらく、この司令室のメンバーでもアシュヴィンについてリリ以上に詳しく知っているものはいない。
ルシオンがどこまで知っていたかはわからないが、チームに余計な刺激は与えていないようだ。もし、知っていたならリリはルシオ

ンに対して認識を変えるだろう。もし知らずに成したのであれば、隊長としての意義を問うためにこぶしを振り上げるのも辞さない覚悟だ。

「あの子たちの盾となるのは私たちの役目だもの！　隊長が新任だからって負けるつもりはなくってよ！」
「それでこそ、うちらのリーダーっす！」
「リーダー最高！」
「姉御、ついていきます！」
「共倒れはいやですよ」

言いたい放題だが、それもチームの色だ。
誰だって好き好んで死地へと人を送り込みたくない。殲滅兵器に選ばれた以上は逃れられない。残されるものが考えるのは、できる限り現場で支えることができる職に就くこと。
ここにいる全員は、何らかの形で資格者とかかわりを持つ者だ。

「それにしても」

リリの声が一オクターブ下がった。

「ルシオン隊長は、どこにいるの？」

チームの新しいトップ、ルシオン・エーンバルドが司令室に顔を出したのは、初日の一回限りだった。

＊＊＊

こんこん、とアシュヴィンはノックした。

「隊長、おはようございます」

こんこん、と繰り返すノック。内側からは「おお、今いくから待っててくれよな」とルシオンの声が聞こえた。しかしアシュヴィンはせかすように何度も何度もノックを繰り返す。

そのたびに「急がせるなよ」や「待ってって言ってるだろ」と焦るような声が聞こえてくる。しかしアシュヴィンはもくもくとノックし続けた。

そして、「おお、今行くから待っててく」と聞こえた瞬間に、無表情で手にしていたマスターキーで扉を開けた。問答無用だった。

「……また、やられた」

部屋の中はもぬけの殻で、アシュヴィンの一日はルシオンを探すことから始まる。

ベットに近づいてめくるとその中から再生機が出てくる。どこをどう設定したのか、ノック音に反応してルシオンの声を流す仕組みになっているようだ。

「いたずらに情熱を傾ける前に、ちょっとは会話をしてくださいよ……っ」

ルシオンにそれを言えば、今度は食堂でカウンセリングが始まる気がする、とアシュヴィンは頭を押さえた。痛い。残念ながら慣れてしまった手つきで、通信機を手に取った。通信先はリリだ。

「今日もやられた。訓練は通常通り。昼から隊長の捜索をするよ」
「了解」

リリも慣れたものだ。短い通信を終えるとそのままアシュヴィンは訓練ルームへと向かう。
初日の夕食以来、ルシオンを捕まえることは困難を極めていた。二日目の朝は朝食時間に食堂にいた。いたってにこやかにあいさつをしてきて、朝食後に迎えに行きます、と告げたのだ。
あのへらりとした顔で、わかった、と言ったくせに！
迎えに行ったアシュヴィンを迎えたのは空っぽの部屋だ。鍵すらかけていない無防備な状態だった。その後大慌てで、全員総出でルシオンを探したが一向に見つからない。
へとへとになったところで、夕食時間にひょっこり出てきた。アシュヴィンは一日の疲れもあり、怒鳴りつけたわけだ。

「鍵もかけずにどこに行っていたんですか！」
「迷子だって、迷子。また探してくれてたのか、悪いなー」

そしてアシュヴィンの怒りが、鍵をかけなかったことにあると思ったのか、次の日からはきっちり鍵をかけていった。部屋に迎えに行っても今度は中に入れない。上司の部屋に無断で入ることなどアシュヴィンにできるはずもなく、その日の昼食のときに応答がないと困ると告げた。迎えに行くまで部屋から出ないでくれ、とも言った。
そうしたら、今日はこれだ。あの人は本当にアシュヴィンより年上なのだろかと真剣に考えてしまった。いちおう探りを入れたところによると、現在二十三歳と聞いている。
見えない。
ルシオンが見つからないと困るわけではない。決済が必要な書類に関しては、なぜか迷わない食堂に持ってきていればその場で書い

てもらうことができる。指揮権や訓練の内容に関してはアシュヴィンが担当してきたものだから、今更戸惑うことがあるわけもない。
これでいいのか……とつい思ってしまっても仕方あるまい。
やる気のない隊長だが、最低限のことはしてくれている。以前の奴に比べれば雲泥の差だ。格段にいい。この三日でちょっと諦めそうになった。

だが、とアシュヴィンは考える。
本気でルシオンを追いかけても捕まえることができない。それは、つまりルシオンの身体能力が高いことを示しているのではないか。
資格者となったものに課せられる訓練は、殲滅兵器の単純な操縦訓練から宇宙空間での運動能力を高めるための基礎トレーニング。反応速度を上げるためにも格闘訓練など多岐にわたる。ちょっと運動ができるくらいの一般人とは比べ物にならないほどだ。
リリたち、司令室に詰めるメンバーは、格闘訓練というより日々進化していく科学との戦いである。もちろん体を動かしているが、アシュヴィンたちと本気で立ち回れと言われれば無理だろう。
たとえチーム最年少のマリエルだとて、リリたちに勝てるのだ。
ルシオンがどんな人間かわからないという感想はいまだ続いている。マリエルたちはすでに怒りが飽和状態になったのか、当てにならないぐうたら隊長！　と声高に言っていた。
仕方ない。本日もルシオン不在のまま訓練となった。アシュヴィンだけが訓練ルームに姿を現したときには、マリエルとカスガが喧嘩をしていた。賭けをしようとしていたらしく、二人ともルシオンが来ないに賭けたいと言い張り、決着がつかないままアシュヴィンが来たらしい。
アシュヴィンは再度頭を押さえた。

＊＊＊

ロイはマリエルの罵詈雑言を聞きながら思っていた。
ルシオン・エーンバルド。チームの隊長に就任した男だ。マリエル曰く、ありえない男。意外にマリエルはルシオンの挙動を観察しているのだろう。よくぞ気付いたと思われるポイントもひとつ一つ上げていく。
迷子という言い訳をいつまで使い続けるのだろうか、とロイも思っている。

へらりと笑う姿は嫌いじゃなかった。藍色の髪と金の目は珍しかったが、笑ってくれる。アシュヴィンやリリにあれだけ言われても態度を変えないところは、尊敬に値するとすら思った。ロイには無理だ。
新しいチームの隊長がどんな人になるのか、マリエルもカスガもきっと不安だったに違いない。特にマリエルは勝気に見えるうえ、ほかの者に弱みを見せようとしなかった。
アシュヴィンのところに行ってるといいんだけど、と思った。このチームに一番遅く参加したのが、今までロイだった。マリエルは年上なのに敬語はやめなさい！　とロイに一喝し（当時まだ十二歳だった）、以来ロイはマリエルだけには普通に話しかけている。マリエルは、遠慮のない物言いをするがロイには弱音を話してくれない。それが、ときどきもどかしい。

「ルシオン隊長は少なくとも、私たちに何もしてこないよ」

ロイは笑ってマリエルを見た。
それがすべてではない。だが、怖いという感情を、ロイはルシオ

ンに抱きはしなかった。むしろ、あの人も迷っているのではないかとすら思った。迷子になっている、というのは、ドームの中でという意味ではなく、もっと別の意味で。

「ロイのくせに生意気よー！」

「ええ、そんな！」

ぷりぷりと怒りを全面に押し出しているときのマリエルは大丈夫だ、とロイは笑った。

＊＊＊

カスガは大あくびをした。眠くてしかたない。普段であればアシュヴィンもカスガに考慮してくれるのだが、ここ二日はそれもなかった。

全力でルシオンを探しても見つからないなんて、ありえないなと思った。年下だが、マリエルの足は速いしロイも気配に敏い。何よりカスガも自分の感覚を最大限まで引き出してルシオンを追いかけた。

だがルシオンは捕まらず、結果疲労が積み重なった。途中で考えることが面倒になった。眠い。目の奥がしびれてきて、行儀悪く横になろうかと考えた。廊下の途中だろうが、どこでも寝てしまうのがカスガである。慣れているチームのメンバーならアシュヴィンに速やかに連絡を取って回収してくれるだろうし。

「隊長もさ、探させるのが面倒。っていうか、逃げないでよね」

条件反射ではないだろうか。逃げたら追いかけるというのは。アシュヴィンにしても困惑しているようだし。今まで周囲にいなかったタイプなのだろう。ルシオンという人物は。

「……隊長？」

ふと顔をあげると、宇宙空間が見える展望台の上にルシオンがいた。星を見るときに長時間見れるように、とリリの一言によってあのあたりにはベンチがあったはずだ。
ドームの中は人工的な光で満ちている。地球は自転をしていてもドームはその場から動かない。太陽の光が当たるときもあれば、当たらないときもある。
星を眺めるにはいい場所だ。

「あれ、カスガ。どうしたんだ？」

ルシオンも気付いたのか、あのへらりとした笑いを浮かべて、カスガを手招いた。

「暇なのか？」
「暇じゃない。眠い。隊長は？」
「俺は迷子」

カスガは眉をぴくりと動かしたが、親切よろしくルシオンを案内するつもりはない。面倒だし、今はとにかく眠たいのだ。
ルシオンはそれをわかっていたというのだろうか。逃げ隠れもせずに、おいでおいでと手を振る。

「そっちに行くのも面倒」

さっくり否定した。

「きれいだぞー。満点の星空だぞー。それに、どうせ寝るなら枕があるほうがよくないか？」

枕、と視線をずらせばぽんぽんと太ももをたたいている。ルシオンが？　膝をカスガに貸すというのか。

「やだ。気持ち悪い」

「ええ。俺の脚はしなやかよ？」

「男の膝が気持ち悪い」

「気持ちいいくらいきっぱり言うねぇ、カスガ」

気を悪くした様子は見えない。カスガのこういった物言いを、快く思わない人間は多い。カスガが変えるつもりはみじんもない。

ルシオンという人物はよくわからない。わかると思っていない。カスガは知っている。すべてを分かち合える人間なんてこの世にはいない。感情があろうがなかろうが、暴言を吐こうがどうしようが、心が通じる人間もいれば通じない人間もいる。

ルシオンは必要以上にこちらに干渉してこない。それは、つまりルシオンも干渉してほしくないのだというスタイルが現れているのではないだろうか。

そのくせ、カスガをわざわざ見かけて声をかける。無視すればいいのにしない。どういう意味なんだろう。アンバランスだ。

ふらふらとカスガはルシオンのそばに歩いて行った。お、とルシオンが声をあげたが無視した。

「なんだよ、素直じゃないんだな」

「うるさい。枕なら黙って」

はいはい、とルシオンはカスガがごろりと横になるのを止めなかった。そのまま休息にカスガは眠りに落ちていく。
カスガは人が苦手だ。だが、ルシオンは気にならない。気配がかすかで、それこそふとした時に空気に溶けてしまうような、そんな気配。眠い、とカスガは目をつむる。
おやすみ、とルシオンの声が聞こえた。その声が存外優しそうに聞こえた。

素直じゃない男（後書き）

読んでいただいてありがとうございました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0450y/

ファントム・ペイン

2011年11月15日22時12分発行